特集「英語の世紀」の地域研究

――特集にあたって

川上 桃子

日本における「地域研究」は、長らく、特定の発展途上国の政治・経済・社会現象を対象に事実解明型の問題設定を行い、現地語を駆使してフィールドワークや文献調査を実施し、その成果を日本語で発表する、というスタイルによって成果を積み上げてきた。アジア経済研究所が発行する『アジア経済』や研究双書シリーズは、このような地域研究の成果の発表媒体として、一定の役割を果たしてきた。

だが、日本の発展途上国研究のありかたには、近年、様々な変化が生じている。地域の固有性を重視する総合的なアプローチから縦割型の研究専門領域との接合性の重視への変化、一国研究から国際比較・地域間比較への研究潮流のシフト等、変化の様相はさまざまであるが、本特集では、このような変化と深いかかわりを持ちながら生起している新たな現象として、日本の地域研究における「英語で論文を執筆する」という発信方法の急速な浸透に注目し、これが発展途上地域の研究にどのような影響をもたらしつつあるのかを考えてみたい。

●日本の地域研究と「英語の世紀」

水村美苗は『日本語が亡びるとき　英語の世紀の中で』（筑摩書房　二〇〇八年）のなかで、英語が「普遍語」としての地位を獲得しつつある今日、日本語による「読まれるべき」文学は亡びつつあるのではないか、という衝撃的な問題提起をした。だが、「日本語が亡びるとき」は、社会科学の分野においてこそ、足早に近づきつつあるのではないか。

むろん、日本人研究者が日本語で研究成果を発表しなくなる日がくるとは考えられない。これまでがそうであったように、これからも、日本語による発展途上国研究の成果は着実に積み重ねられていくだろう。だが、長期的な視点でみれば、個々の研究者にとって「日本語で書くこと」の意義が大きく低下するような事態は十分に考えられる。

もとより米国および欧州発の研究潮流の影響力がきわめて強い社会科学の分野では、英語をデファクト・スタンダードとする高度に統合化された世界規模の学術市場が出現しつつある。電子ジャーナルの普及や研究資源としてのインターネットの重要性の高まりといった研究インフラ面での変化とあいまって、一部の英文ジャーナルを頂点とする階層的な構造への統合の潮流は、日本の地域研究にも着実に押し寄せつつある。

●「英語での発信」の趨勢と揺らぐ研究コミュニティの多元性

英語で研究成果を発表することの最大のメリットは、読み手が飛躍的に増えることにある。英語の学術マーケットは、圧倒的な書き手と読み手の数を有し、ここから、日々新たな概念や分析枠組みや実証分析の成果が生み出されている。この活気にあふれた学術コミュニティに参加し、自らの分析や思考をより多くの読み手に向けて発信したいと考えるのは、研究を志す者の自然な願望であろう。英語が、国境を越えた社会科学の知識蓄積の共通言語としての地位を独占しつつある以上、英語での成果発信の重要性は明らかである。

だが、英語で論文を執筆するということは、単に使用言語の切り替えにはとどまらないより根源的な問いを地域研究者につきつける。吉野耕作が本号の巻頭エッセイのなかで指摘しているように、言語の切り替えは、出版文化、研究者のネットワークなどのパッケージの全体に関わる問題だからである。

何語で書くかをめぐる研究者の選択は、「誰に向けて書くのか」「研究成果に対する評価づけを誰に委ねるのか」をめぐる判断と不可分である。英語での発信の趨勢の広がりが日本の地域研究にもたらす影響が、「読み手の数の広がり」というハッピーな帰結にのみ収斂しえない理由はここにある。加えて、「英語での発信」が研究現場への成果主義の浸透とそのものさしとしての欧米の著名ジャーナルの威信の高まりといった制度的な要因と結びつくとき、その影響はさらに複雑なものとなり、様々な問題をはらむことになる。

具体的には、たとえば「英語での発信」重視の行き過ぎは、学術コミュニティの多元性を失わせる可能性を持っている。日本語をはじめとする「ローカル」な言語で

構成される研究コミュニティには、それぞれの社会の切実な問題に発する問いかけや、現実認識をめぐる論争、実証研究の積み上げのなかから共有されるにいたった固有の着眼点、さらにはそれを操作化するための固有の概念の蓄積があり、それが個々の研究者の問題関心のありかたや分析アプローチをめぐる創意工夫を下支えする栄養分としての役割を果たしている。

だが、こういったローカルな研究土壌のなかから育った研究者が英語の学術界の階層構造に向けて発信するとき、ローカルなレベルでは極めて切実な問題意識に基づく研究や、英語に翻訳されていない先行研究に依拠する分析や、翻訳の難しい概念を基礎とする研究成果が正当な評価を得ることにはしばしば困難が伴う。地域研究が、着想や手法や題材の多様性を独特のバイタリティの源泉としてきたことを考えるとき、英語の学術市場への参入の代価は大きい。

また、研究の国際化の道筋には複数の可能性があることも忘れてはなるまい。発展途上国を研究する日本人研究者のなかには、韓国語や中国語、インドネシア語、タイ語のようなローカルな言語での発信を通じて、現地の研究者コミュニティとの対話をしてきた伝統がある。研究者間の濃密な対話に、現地語を用いて参加できるだけの語学力を身につけることは、地域研究者のあこがれである。「英語での発信」志向の行き過ぎは、このようなかたちでの研究者間の対話を細らせる事態を招きかねない。

●発展途上国をめぐる研究コミュニティの多元的な発展へ向けて

本特集では、専門領域と研究対象地域を異にする九人の研究者たちが、それぞれの研究の現場で起きている「英語の世紀」現象のありようや、これに対する研究コミュニティの反応、そして英語で書くことをめぐる自分自身の経験や考えをつづったエッセーをお届けする。この九篇のエッセーからは、英語で書くことが研究者にもたらす世界の広がりとともに、英語で書くことに伴う複雑な力学や、「英語での発信」が内包する様々な困難が浮かび上がってくる。

言語選択の問題は「何を、どう書くか」という問題そのものである。私たちにとって書くということは、しばしば慣れ親しんだ母語でしか表現できない複雑さを記述する過程でもある。本特集のなかで塩田光喜がいうように、「言葉の湧き出る泉」の獲得は一回限りの経験であり、そのような泉の存在こそが、深い思索を可能にする。他方で相沢伸広が言うように、複数の言語での執筆可能性をもつことは、私たちに、研究課題の意味を考えるうえでの複数の尺度を与えてくれる。鶴巻泉子は、フランス地域研究の立場から、研究の英語化が様々なレベルで研究者と社会の関わりを変化させることを、コンテキスト性と読み手との関わりという視点から論じる。

英語での発信はまた、研究者のキャリアのありかたと深く結びついた問題である。佐藤章は、研究者の養成システムという切り口から、日本語の学術リソースの先細りが若手研究者に及ぼしうる負の影響に警鐘を鳴らす。大原盛樹はアメリカの学部を軸とする縦割型のキャリア形成システムが、地域研究者の育ちにくさの背景となっていることを指摘している。英語、日本語、中国語で多数の業績をあげてきた台湾の経営学者・劉仁傑は、台湾における英語ジャーナル中心主義の弊害を鋭く指摘している。東アジアの国々で日本留学組研究者が置かれている苦境に対して、日本側からの取り組みを求める劉の問いかけに、私たちはどのように応えることができるのだろうか。

宇佐見耕一は、英語とは異なるかたちで、国境を越えた学術コミュニティの共通言語としての役割を果たしてきたスペイン語の現状に焦点をあてた。日本経済史の中村尚史のエッセーからは、豊かな研究の土壌を持つ日本経済史の研究者が、海外の日本研究者との出会いから受けた刺激が活き活きと伝わってくる。クー・ブーテックは、母語ではない英語で「必然的に」執筆してきた自らの言語体験をもとに、日本人研究者にとっての英語で書くことの意味を論じている。

英語で執筆することで開かれる国境を越えた活発な相互交流の磁場は、私たちを強くひきつける。だが、英語で発信することが、自動的に地域研究の国際化やその水準の向上を意味するわけではない。本特集が、学術コミュニティの使用言語という問題の次元を越えて、地域研究のグローバル化に対する複眼的な視座を提供することができるならば幸いである。

（かわかみ　ももこ／アジア経済研究所技術革新と成長研究グループ）